太鼓八郎

〈登場人物〉
八郎
綾女
作次
八郎の父（吾助）
八郎の母
綾女の父（権三）
綾女の母
村役
村の男たち
村の女たち
照爺（鬼八の役者が演ずる）
晋八（幻影）
晋八の女房（幻影）
八郎の兄姉たち（幻影）
鬼八
闇の主

1

低く野太く、気味の悪い声が聞こえる。
「一本、二本、三本、四本、五本……」
と何かを数える声が延々と続く。
老婆のナレーションが重なる。

老婆の声　赤い櫛のことかい。赤い櫛はな、お守りなのさ。ここらじゃ、母から娘に代々伝えられる。娘が女になったときに渡す習わしだ。どうして赤い櫛だって？　赤い櫛は魔除けだ。櫛の歯は魔に食らいつく

んだと。櫛は髪にさすだろ。カミはな、神様だ。神様のおられるところにある赤いものといったら何だ？　そうだ、鳥居さ。魔が近づくのを防ぐのが鳥居。赤い櫛は鳥居なのさ……魔って何かだと？　災いだ。いろんな災いを連れてくるやつらだ。どんな姿かなんて、婆も知らねえ。知りたくもねえ。

読経のように続いていた声（ひたすら数を数えているだけ）が大きくなる。同時に何種類もの声が混じる。女の声、子供の声、年寄りの声、テンポもバラバラで「何本」と言っているのか聞きとれない。ボリュームだけはどんどん上がり、耳を覆いたくなるほど。

突然、止む。

間。

舞台は暗い。わずかに蠟燭の明かり。中央に平伏す鬼八。小柄だが赤銅色のたくましい体。蓬髪、褌姿。

闇の主の声（冒頭の読経のような声と同じ）九百と九十と八本。残りは二本。

鬼八（伏したまま）九百と九十と八本。残りは二本。

闇の主の声　九百と、九十と、八本。残りは二本。それでぴったり千本。

鬼八（顔を上げ）九百と、九十と、八本。残りは二本。それでぴったり、千本でございます。

闇の主の声　おまえは誰だ。

鬼八　卑しい鬼でございます。

闇の主の声　けだものめ。何の用だ。

鬼八　お役に立ちに。

闇の主の声　役に立つだと。

鬼八　はい、必ず。

闇の主の声　鬼よ、わしの望みを知っているのか。

鬼八　残りの二本をそろえること。

闇の主の声　そうだ。だが何でもいいというわけではないぞ。選びに選んだ、この世で最もすぐれたものが入用だ。

鬼八　存じあげております。

闇の主の声　鬼よ、見ろ。ここにあるのは、国一番といわれた剣の使い手の腕だ。この腕は戦場で一日に百人の首を刎ねた。こちらは国一番といわれた弓の使い手の腕だ。こいつは飛んでいる燕の目も射抜いた。こちらは国一番の機織りの腕だ。一晩に八畳もの曼荼羅を織り上げた。それからこちらは国一番の琵琶の名手の腕だ。そいつの琵琶は亡霊も泣かせた……これも、これも、これも……これも……すべてが人の世で最もすぐれた技を持つものの腕だ。それを千年かけて集めた。九百と九十と八本。そしてついに……。

鬼八　残りは二本に。

闇の主の声　残りは二本。だが、その残りの二本が、最後の二本がどうしても見つからぬ。千本に一本が欠けても、何にもならぬというのに。

鬼八　千本そろうと、どうなるのでございますか。

闇の主の声　それを知ってどうしようというのだ、虫けらめ！

鬼八、平伏す。

闇の主の声　教えてやろう。千の手を持つ仏を知っておるか。

鬼八　千手観音、でございますか。

闇の主の声　口にするのも忌々しいが、あれこそ千の腕の技をもって、万の力を支配するもの。

鬼八　では、あなたさまも。

闇の主の歌。『光を闇に』

三千世界を思いのままに

操るための千の腕
我に与えよ　その腕で
この世をあの世に
光を闇に
浄土を地獄に変えようぞ
嘆きは積まれ山となり
恨みは満ちて海となる

三千世界を跡形もなく
滅ぼすための千の腕
我に与えよ　その腕で
この世をあの世に
光を闇に
浄土を地獄に変えようぞ
呪いは赤く月を染め
腐って濁る血も川も

闇の主の声　千本だ。千本に一本も欠けてはならん。だが、いまだに見つからん。

鬼八　見つからぬならば。

闇の主の声　見つからぬなら何だ。

鬼八　育てればいいのです。種をまけばいいのです。

闇の主の声　黙れ、この騙りめが！

鬼八　誓って騙りなどでは。

闇の主の声　……種をまいたのか。

鬼八　まもなく芽を出しましょう。立派に育てて見せましょう。

闇の主の声　それをおまえが刈るというのだな。

鬼八　さようでございます。

闇の主の声　鬆が立った出来損ないを持ってきてみろ。その首をもぎとってやるぞ。

鬼八　いかようにも。

闇の主の声　ならば行け！　一日も早く、一時も早く手に入れるのだ。

鬼八、闇に消える。

蝋燭の炎が大きく揺れ、舞台が明るくなり、闇の主が映し出される。背中か

ら無数の腕を生やした異様な姿。

2

村人の葬列。先頭に幟。鈴の音。
葬列は舞台を巡る。
破裂音。列がほどけると中央に早桶。
八郎、喚きながら桶の周りの村人を追い立てる。いきなり持っていた棒をバチがわりに早桶の蓋をたたき出す。
村人たち、そばへ近づけない。狂ったようにたたき続ける八郎。しまいには桶の上に飛び乗ってたたき出す。
一瞬の間。
八郎の父親の吾助が飛び出し、八郎を地面にたたきつける。唸り声をあげながら、息子を殴る。
止めに入る村の男たち。
うずくまっている八郎。

村役　一体どういう料簡だ、八郎よ。おっ母様の弔いだぞ。そこに入っているのは仏様だ、おまえのおっ母様だ。小さな子供でもあるまいに、そんなたわけをする者がいるものか……さあ、皆の衆。

葬列が再び動き出す。
ぐったりしている八郎に綾女が近づこうとするが、綾女の母がそれを許さず、手を引っ張る。
葬列、消える。
中央にしゃがみこんだままの八郎。
村の男１、２、村の女１、２の噂話。

村の男１　まったく罰当たりな。

村の女２　あきれたもんさ、あれじゃ、おっ母さんも成仏できまい。

村の男２　吾助のやつ、わしらが止めなければせがれを殴り殺していたぞ。

村の女１　痛い目にあって当然。早桶を太鼓代わりにドンツクされてたまるものか。

村の男２　葬式の間は神妙にしておったに、何を血迷ったか。

村の女２　親孝行の息子だったが。

村の男２　おっ母さんもかわいがっておったからな。さぞ心残りのことだろうよ。

村の女２　あの家には七人も子供がいたのに、残ったのは八郎だけ。

村の女１　ここらじゃ珍しいことでない。どこのうちも似たり寄ったり。だが、出来の悪いのが残っちまった。

村の男１　出来損ないほど可愛いか。

村の女２　出来損ないは言い過ぎだ。

村の男１　言い過ぎなもんか。親の入った早桶を太鼓代わりにするやつだ。まったく、あいつは餓鬼の頃から太鼓三昧、太鼓道楽だ。さぞや前世はお気楽な身分だったことだろうよ。一年中、あの丸太をポンポコやってやがった。俺が声をかけても返事もしやしねえ。

村の女２　おっ母さんが言ってた。あの子は赤ん坊の頃から太鼓が好きで、どんなにむずがってるときでも、デンデン太鼓を鳴らしてやると機嫌がなおったって。

村の女１　桶もたらいも、みんなたたいて底を抜いちまったんだろ。

村の男１　底抜きじゃねえ。俺にいわせりゃ底抜けのたわけだ。

村の男２　それでおっ母さんが、あの丸太をくれてやったわけか。

村の女２　あれなら底も抜けない。

村の女１　まるで犬っころみたいに縄をつけて、どこへでも引きずって。

村の男１　餓鬼のうちならご愛敬。いい歳をしていまだに太鼓遊びに夢中だ。野良にはとんと気が入らねえ。ありゃ、根っからの浮かれ者。百姓なぞやめて、旅回りの芸人にでもなればいいんだ。

村の男１、２、村の女１、２による歌。
『太鼓八郎』

太鼓のお稽古　ポンツクツ
ま食う箸が　初手のバチ
お椀も膳も　あざだらけ
お椀も膳も　あざだらけ
太鼓八郎　トンツクツ
のんきなもんだ　お気楽だ
太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

太鼓のお稽古　ポンツクツ
桶もたらいも　底を抜く
お鍋も釜も　こぶだらけ
お鍋も釜も　こぶだらけ
太鼓八郎　トンツクツ
いい気なもんだ　お目出度だ
太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

太鼓のお稽古　ポンツクツ
三つ子の魂　百までも
山の啄木鳥　秋の虫
山の啄木鳥　秋の虫
太鼓八郎　トンツクツ
あきれたもんだ　お手上げだ
太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

村の男１、２、村の女１、２退場。

八郎　お、おっか、おっ母あ！

３

八郎の家。
布団の上の母親の肩をもむ八郎。

八郎の母　ああ、すっかり楽になった。おまえ、疲れたろ。

八郎　平気だ、おっ母。俺は平気だ。

八郎の母　あんまり気持ちがいいもんだから、うとうとしてしまった。おっ母な、夢を見てた。

八郎　夢？　どんな夢だ？

八郎の母　秋祭りだ。

八郎　秋祭り……。

八郎の母　おまえは小さい頃から祭りが好きで、本物の太鼓が見れるって、ドーンドーンが聞けるって。

八郎　覚えてねえ。

八郎の母　覚えてねえはずがねえ……八郎、おまえ、たたきたいだろ。

八郎　何を？

八郎の母　太鼓に決まってるだろ。秋祭りの太鼓だ。

八郎　俺になんか……できねえ。

八郎の母　できねえものか。おまえ、太鼓が上手だもの。

八郎　俺は丸太をひっぱたいているだけだ。

八郎の母　そんなことない。おまえはきっと上手にたたける。おっ父の血をひいて（あわてて口を濁す）

八郎　おっ父がどうした。

八郎の母　何でもねえ。

八郎　……なあ、おっ母。どうしておっ父はあんなに太鼓を嫌う。

八郎の母　そんなことはなかろ。

八郎　嫌ってる。おっ父は太鼓を嫌ってる。俺の太鼓も嫌ってる。俺のことも。

八郎の母　何を言ってる。おまえのことを嫌ってなんかおるものか。

八郎　でも太鼓をやると、すぐ怒鳴る。

八郎の母　そうだな……。

八郎　嫌いなんてもんじゃねえ。太鼓を憎んでるみてえだ。

八郎の母　ならおまえは、どうしてそんなに太鼓が好きなんだい？

八郎　……よくわからん。ただ、ポンツクをやってねえと体がむずむずしてきて、どうにも辛抱できなくなる。何かたたいてねえと、おさまらなくなる。

八郎の母　そりゃ病気だな（笑）。

八郎　うん、きっと病気だ（笑）

八郎の母、咳き込む。

八郎　大丈夫か？

八郎の母　ああ、大丈夫。

八郎　おっ母は太鼓が好きか。

八郎の母　ああ、好きだ。おっ母は太鼓の音も好きだが、たたく姿を見るのも好きだ。

八郎　そうか、でも俺には無理だ。

八郎の母　どうしてそう決めつける。

八郎　俺は役立たずのごくつぶしだ。そんな者に秋祭りの太鼓はさわれもしねえさ。

八郎の母　ごくつぶしであるもんか。

八郎の母の歌。『望みがあるのなら』

もしも望みがあるのなら
あきらめないで　捨てないで
望み続けていたならば
いつかかならずかなうもの
いつかかならずかなうもの

たとえ大きな望みでも
しりごみせずに　おそれずに
望み続けていたならば
いつかかならずかなうもの
いつかかならずかなうもの

心の中に育ててお行き
枯らさぬように　大切に
祈りの言葉と精進で
きれいな花が咲く日まで

それがはかない望みでも

笑われようが　負けないで
望み続けていたならば
いつかかならずかなうもの
いつかかならずかなうもの

八郎の母、激しく咳き込む。苦しそう。

八郎　おっ父、呼んでくる。

八郎の母　いい。いいから、ここにいてくれ。……八郎、おっ母な。一度でいい。おまえが秋祭りの櫓の上で太鼓をたたく姿を見たかった。おまえ、上手だもの。きっと見事にたたくだろうよ……ドーンドーン、ドンチキチ、ドーンドーン……村の衆がおまえのバチさばきに見とれとる。娘たちが見とれとる……ドーンドーン、ドンチキチ。

八郎　おっ母……。

八郎の母　八郎、どこへ行った？

八郎　どこへも行かん。ここにいる。

八郎の母　ドーンドーン、ドンチ……あれ、八郎、頭に何をさしてるんだ。おやおや、娘っ子じゃあるまいに、赤い櫛なんぞさして……（ことときれる）

八郎　おっ母。どうした。おい、おいっ、おっ母。おい……起きろや、おっ母。目を開けろ。目を開けろ！

野辺を送る鈴の音、激しく。
八郎、丸太をたたいている。

八郎　おっ母、起きろ。俺、肩たたいてやるで。おっ母がいいというまで、いくらでも。だから起きろ。なあ、なあ。

村の女２　八郎はきっと早桶の中のおっ母さんを起こしたかったんだろ。

八郎　痛くねえか。おっ母、強すぎねえか。俺は平気だ、ずっとずっと、半日でも、一晩中でも平気だ……眠ってるのか、おっ母。おっ母、おっ母……もう起きろや。

村の男２　おふくろをなくしたばかりに、今

度は親父が寝付いてしまった。

村の女２　八郎も気の毒に。

村の男１　気の毒だって。あいつは親が死んでも寝込んでも、一向に根性は変わらねえ。相も変わらずポンツクだ。

村の女１　おっ母さんが死んでからも、呆けたように一日中お太鼓だ。つらいのだろうが、ほどがあるってもの。

村の男１　吾助が動けなくなってからというもの、畑は荒れ放題。たまに畑にいるので珍しいこともあるもんだと思ったら、あの野郎、鍬をふるいながらトンツクツをやってやがる。

村の女１　あきれたもんだ。

村の男１　今年も不作で、みんな心細くなってるというに、あいつだけは呑気だ。

村の女２　去年もよくなかった。年々ひどくなるよ。このままだとまた……。

村の男２　不吉なことを口にするな。口にすると、ほんとうになる。

4

八郎の家。

八郎の父、吾助が寝ている。

吾助　八郎。

八郎　……なんだ。

吾助　頼みがある。

八郎　水がほしいのか。

吾助　いや……あれをやってくれ。

八郎　あれって？

吾助　あれだ。その……太鼓だ。

八郎　太鼓？

吾助　いつものやつだ。ポンツクだ。

八郎　今、ここでか？

吾助　そうだ、今、ここで。

八郎　やっていいのか？

吾助　ああ。

八郎、父親の顔色をうかがいながらおそるおそる丸太をコンコン、スココンとたたき出す。やがていつものように夢中になって打ち出す八郎。囲炉裏の火のはぜる音で我に返り、止める。

吾助　いいか八郎、太鼓は腕で打つのではない。体全体を使って打つ。おまえのは腕力にばかり頼りすぎる。

八郎　……おっ父は太鼓が嫌いじゃなかったのか。

吾助　嫌いではない。

八郎　でも……。

吾助　恐ろしいのだ。

八郎　恐ろしい……。

吾助　おまえにはわからん。いや、わかってほしくない。一生、わからぬままでいてほしい。

八郎　おっ父。

吾助　だが、そうもいくまい。おそらく、わしらの考えも及ばぬ大きな力が働いているのだ。わしもおまえもそれに巻き込まれていく運命なのかも知れん。

八郎　いったい何の話だ。

吾助　ここ三年、不作が続いた。だがこれは前ぶれにすぎん。これからが本番だ。

八郎　もっとひどいことが起こるのか。

吾助　ああ。

八郎　俺にはどうしようもねえ。

吾助　おまえが……おまえが立ち向かわなければならないときがきっとくる。

八郎　おっ父、変だぞ。さっきからわけのわからぬことばかり。

吾助　もう一つ大事なことを伝えておく。それは、太鼓は心で打つということだ。

八郎　心？

吾助　難しい話ではない。おまえは一度、心で打ったことがあるじゃないか。

八郎　え？

吾助　おっ母の早桶をたたいたときだ。
八郎　……。
吾助　あれが心で打つということだ……八郎、おっ母は今わの際に何を言った？
八郎　秋祭りの夢を見たって。俺が太鼓をたたいている……おかしなことも言ってた。
吾助　おかしなこと？
八郎　俺が頭に櫛をさしているというんだ。それも赤い櫛を。
吾助　赤い櫛……そんなことを言ったのか。
八郎　何か意味があるのか？
吾助　……八郎、もう一度やってくれんか。もう一度、太鼓をやってくれ。
八郎　あ、ああ。

八郎、丸太をたたき始める。すぐ夢中になるが、ふと父親の方を見る。異変に気付き、近づく。

八郎　おっ父……。

5

神社。太鼓の稽古場。
村の男３、４、５、６と村役。

村の男３　作次さはまだか？
村の男４　名人が来なくては稽古が始まらん。
村役　まあ待て、じきに来る。
村の男５　俺らはどうせ付け足し。
村の男４　そういうな。
村役　今年も不作に終わった。来年こそよい年にしなけりゃならん。そのためにも秋祭りで景気をつけんと。
村の男５　確か去年も同じことを言わなんだか（笑）。
村の男３　笑い事ではない。年寄りはみな、二十年前と同じだと案じている。
村の男６　二十年前？

村の男４　おまえは生まれてなかったな。

村の男３　飢饉の年だ。

村の男６　知らん。

村の男５　俺もぼんやりだ。

村の男４　若いやつらは気楽なもんだ。

村の男５　そんなことない。俺たちだって気にかけてる。

村の男４　そうかい。でも八郎みたいなやつもいるじゃないか。

村の男６　あんなのと一緒にするな。

村の男５　ありゃ、ただの太鼓馬鹿。

村の男３　変わり者とは聞いていたが、そんなにひどいのか。

村の男４　ひどいなんてものじゃない。

村の男３　だが、太鼓馬鹿というくらいなら、太鼓は達者でないのか？　なぜ呼ばぬ。

村の男５　あいつのたたくのは丸太だ。

村の男３　丸太？

村の男４　丸太をたたくのが好きなら、百姓なんぞやめて樵にでもなればいい。

村の男６　それがいいや。

村の男たち、笑う。作次、登場。

作次　遅れてすまんな。ちょっと寄るところがあってな。

村役　さっそく稽古を始めてくれ。

作次　その前に言っておくことがある。わしはもう今年から櫓に上らん。

村役　そりゃ、どういうことだ。

作次　わしも歳だ。少しならいいが、長く打っていると腕がしびれてくる。バチを持つのも辛い。

村役　何を言ってる。名人のおまえが打たんで一体誰が打つというのだ。ここに雁首揃えている連中はいわば添え物だ。

作次　こいらが引き際なのだ。

村役　おまえの代わりなど誰にも務まらん。

作次　後釜は……。

村役　ちょっと待て。秋祭りの太鼓の頭はど

の村でも若い者の憧れだ。それを譲られるとなれば、我も我もと名乗りをあげるだろう。だが、この村ではどうかな……（村の男４）おい、おまえ、やるか？

村の男４　とんでもねえ。

村役　（村の男３に）そっちはどうだ？

村の男３　とてもとても……。

村役　（村の男５に）おまえは？

村の男５　考えたこともねえ。

村の男６　俺もおことわり。

村役　おまえなんぞに聞いてねえ……作次さ、どうだ、このざまだ。無理もねえ、近郷近在で知らぬものなしの太鼓名人のおまえにとって代わろうなどという大それたやつは、この村にいねえ。比べられて、散々けなされるのが関の山。晴れの舞台がさらし台になっちまう。

作次　……後釜に推したいのが一人いる。

村役　誰だ。おまえの眼鏡にかなうようなやつがいるのか？

作次　八郎だ。吾助のせがれの。

村の男５　八郎だと！

村の男４　太鼓馬鹿の八郎！

村役　あいつが飯より太鼓が好きなのはよく知っている。だがな、祭りの太鼓は丸太をひっぱたくのとは勝手がちがう。その八郎を作次さの代役というのは……まだ歳も若いし。

作次　わしが必ず仕込む。どうか、やらせてもらえないか。

村役　うーん、八郎か。

作次　どうか、頼む。

村役　……よし、わかった。作次さがそこまでいうなら。

村の男３　八郎にやらせるのか。

村役　しかたあるまい。おい誰か、八郎を。

作次　そこに呼んである……八郎。

八郎、登場。

村役　連れてきたのか。

作次、八郎に太鼓のバチを渡す。

作次　ひとつたたいてみろ。

八郎、太鼓の傍らへ。たたいてみる。

作次　どうだ、本物は？

八郎　バチが弾かれる……それから下っ腹をどやされたような。

作次　よし、そこをどけ……いいか、八郎、一度しかやらんぞ。瞬きせずに、よく見ておけ。耳の穴をかっぽじって、よく聞いておけ。

作次、太鼓を打ち出す。

真剣に見つめる八郎。一曲終わる。

作次　さあ、今わしのやったように打ってみろ。

八郎　そんな、無理だ。いきなり。

作次　いきなりもくそもない。いいから、おまえの好きなように打ってみろ。

打ち出す八郎。一度聞いただけの作次の演奏通りに打つ。

村役　ほお、こりゃ……。

作次　おまえらも一緒に。

村の男3、4、5、6もそれぞれの太鼓の傍へ。

五人での合奏始まる。

と、作次、手にしていた竹の棒で八郎をこづいて演奏を止める。

八郎　いてっ……作次さ、何をする。

作次　もう一度、始めから。

最初から始めるが、また途中で小突かれる。

八郎　どこがまずいのだ。まずいところを教えてくれ。

作次　どこがだと？　どこもかしこもだ。

八郎　口で言ってくれれば直す。小突かなくてもいいではないか。

作次　何を！　口で言ったらわかるというのか。この生意気な小僧め。体で覚えるほかに手はあるものか。ぐずぐず言わずに、さあ、始めからだ！

打ち出す、八郎。また途中で止める作次。その繰り返し。

ふらふらになる八郎。

作次　一休みするか……八郎、おまえは残って続けていろ。

村の男３　何だか知らんが、少しも前に進まんではないか。

村の男４　これでは稽古にならん。

村の男５　作次さの見込み違いだぜ。

村の男６　ざまあない。

村の男３　これでは祭りに間に合わないぞ。

村の男たち、ぶつぶつ言いながら退場。

八郎、一人になる。

八郎（独白）俺を後釜にだと……はなからそんな気はなかったんだ。太鼓馬鹿の俺をからかうつもりだ。ちくしょう、人を虚仮にしやがって。何が太鼓名人だ。

間。

八郎　おっ母、俺、太鼓がたたけると思って……おっ母が楽しみにしてた……でももうダメだ。これでもう二度と出番はないよ。

八郎、ドーンと一打ち。

八郎　ああ、いい音だ。これもきっと今日限り。よおし、これで終わり。打ちおさめだ。ならば、あの世のおっ母に、それからおっ父に聞かせてやるか。

八郎、太鼓に向い、打ち始める。それまでと違って顔つきも穏やか。夢中になって打っている。

作次、村役、村の男たち戻ってくる。作次、にやりと笑うと、目で合図。村の男たちも八郎の太鼓に合わせる。一曲打ち通す。

村役　おお、八郎よ、たいしたもんだ。先のと比べたら、雲泥の差。さすが作次さが見込んだことだけはある。

作次　なあに、まだまだ。今日はほんの小手調べ。明日からもっと厳しくなるから覚悟しとけ……今日の稽古はこれまでだ。

八郎、わけがわからない。村役、村の男たち引き上げる。

作次　八郎、少しはわかったようだな。

八郎　……。

作次　おまえは太鼓を鳴らそうとした。

八郎　それはいけないのか。

作次　太鼓は腕っぷしで鳴らすものではない。太鼓の音は、引っ張り出してやるものだ。太鼓の中からな。

八郎　太鼓の中から？

作次　祭りの太鼓とはそもそも何だ。村の衆、皆を楽しませるもの、慰めるもの、ちょっと浮かれた気持ちにさせるもの、元気にさせるものだ。違うか。

八郎　……そうだ。

作次　力ばかり入れたって、心が入らなきゃ、太鼓はいい音を出してくれねえ。皆の気分

をよくさせたい、そんな気持ちで打てば太鼓も気持ちよく響く……おまえ、今、何を思って打った？

八郎　……おっ母のことを。

作次　そんなことだろうと思った（笑）。

八郎　おっ父の言ったこと、思い出した。

作次　吾助が何を言った？

八郎　太鼓は腕で打つのではない。心で打つんだと。

作次　何だ、しっかり教えてもらっていたのではないか。やはり血筋だな。吾助とわしは餓鬼の頃から何をするのも一緒でな。太鼓でも競い合った仲だ。

八郎　太鼓を？　おっ父が？

作次　若い頃はわしよりも数段うまかった。

八郎　嘘だ。

作次　なぜわしが嘘をつかねばならん。

八郎　太鼓を打つとこなど、ただの一度も見たこともなかった。

作次　そうか……。

八郎　俺が太鼓の真似をするとどやしつけて……でも、死ぬ前にこんなことを言った。太鼓は恐ろしいと。

作次　……。

八郎　おっ父はなぜ太鼓をやめたのだ？　名人の作次さよりうまかったのに。なぜ、恐ろしいなどというのだ？

作次　それは……そんなこと、わしは知らねえ。

八郎　何か話せねえことがあるのか？

作次　そんなもの、あるわけねえ！

6

秋祭り。櫓の上に太鼓が並ぶ。その中央、一段高い場所に八郎。

太鼓、浮き浮きするような陽気な調子。村人たちによる『秋祭りの唄』。

一日の楽しみ
眠る前の一時
疲れ果てた体を横たえて
天上眺めるひと時
一年の楽しみ
秋祭りの一夜
土にまみれた暮らしの
つらさ忘れる一夜

さあ　唄えや唄え
声張り上げて
唄えや唄え
のど枯れるまで
さあ　踊れや踊れ
腰を伸ばして
踊れや踊れ
目の回るまで
今宵一夜は太鼓に誘われ
今宵一夜は男と女
今宵一夜はご勘弁

八郎のソロ。勇壮に。

村の男７　作次さのかわりに八郎が打つというのはほんとうだったのか。

村の女３　てっきり作次さが打ってるかと。

村の男８　名人と間違われるとは、八郎もたいしたもの。

村の女４　若い者の太鼓は勢いがある。作次もいい後継ぎができた。

村の女３　勢いだけじゃない。何だか、いい心持になってくる。

村の女４　おやおや、ずいぶんな惚れこみようだな。

村の男７　よくよくみれば、八郎はなかなかの男前。今年の秋祭りの花形だ。

八郎に見惚れている若い娘たち。気に入らぬ顔の若者たち。

村の女５　ほれぼれするねえ。
村の女６　ほんと。
村の男９　あいつはただの太鼓馬鹿だ。太鼓馬鹿が太鼓をたたいている。それだけのことじゃないか。
村の男10　そうとも太鼓なんぞ、タヌキだってたたく。
村の女５　何だ、おまえさんたち、妬いているのかい？
村の男９　妬くだと！　あの八郎を？　冗談を言うな（笑）。
村の女６　男らしくないねえ。潔く、負けを認めたらどう。
村の男10　俺たちが負けただと！　あの、ごくつぶしのポンツク野郎にか。
村の女５　私らだけじゃないよ。村の娘たちはみんなそのポンツク野郎にご執心だよ。八郎さ、今晩はそこら中からお座敷がかかってたいへんだよ（笑）。
村の女６　お座敷？
村の女５　何だい、おぼこぶって。夜、忍んできてって誘うことさ。
村の男10　ああ、面白くねえ！

太鼓の合奏。

村の女３　あれ、あそこにいるのは権三のところの綾女じゃないか。
村の女４　そうだ、綾女だ。大きくなったなあ。色が白くて、器量好しだ。
村の男７　本当なら若いやつらがほうっておかねえのだろうが。
村の女３　あの子は気立てもいいよ。働き者だし。
村の男８　じっと太鼓の方を見ているが、聞こえるのかい。
村の女４　聞こえはしまい。
村の男８　それじゃおもしろくなかろうに。
村の女３　祭りの賑わいは綾女にもわかるだろうさ。

綾女、八郎を見ている。

村の女５　あれは綾女じゃない。

村の男９　来ていたのか。

村の女６　いつみてもきれいだね。

村の男10　村一番だ。掃き溜めの鶴だ。

村の女７　私らを前によくいうね。

村の男９　雪のような肌の白さ、女鹿みてえな黒い眼にぞくっとこねえ男はいねえ。

村の男10　綾女が大根なら、おまえらはさしずめ牛蒡だ。

村の女６　何だって！

村の女５　そんなに贔屓なら、嫁にもらえばいいじゃないか。

村の男10　一晩ぐらい可愛がるならいいが、嫁となるとなあ。何かと不便だ。

村の女６　勝手なことぬかせ！

村の女５　その面でよくいうわ。

村の男９　こいつは一度、綾女の寝間に忍び込もうとして権三のおやじにぶちのめされたのさ。

村の女５　はっは、ざまあない。

村の女６　綾女には太鼓が聞こえるのか。

村の男９　聞こえないさ。

村の女６　でも、ほら、さっきから耳をすましているような。

八郎の太鼓のソロ。

再び、『秋祭りの歌』

さあ　唄えや唄え
酔いに任せて
唄えや唄え
豊年満作
さあ　踊れや踊れ
骨きしませて
踊れや踊れ
裾をからげて
今宵一夜は太鼓に浮かれて

今宵一夜は老いも若きも
今宵一夜は無礼講

7

神社の稽古場。
太鼓を撫でまわす八郎。
バチを持ち、一回打ってみる。

八郎　ああいい音だ……こんなに早く夢がかなうと思わなんだ……おっ母に見せてやりたかったな。聞かせてやりたかった。

と、誰かの視線を感じ、あたりをうかがう。
綾女が隠れている。

八郎　気のせいか……。

もう一度、見まわす。

八郎　おかしいな。祭りも終わって、ここに用事のある者などいないはず……。

綾女の頭が少しのぞく。

八郎　ありゃ、何だ？（目をこする）……赤いものが、動いたぞ……太鼓の打ちすぎで俺の頭がおかしく……。

八郎、近づく。

八郎　わっ！　誰だっ！

八郎、綾女を見つけて驚き尻もち。綾女も同様に。

八郎　何だ……あ、綾女か……ああ、驚いた。おまえ、どうしてこんなところにいるんだ。

八郎、綾女を助け起こし、子供にするように土を払ってやるが、恥ずかしがっているのに気づき手を引っ込める。

八郎　こんなところにいると……その……いろいろ……おかしな噂をたてられる……だから、早く、帰れ。

八郎、綾女の背中を押す。

綾女、一旦従うが、すぐに戻り、懐から出した包みを押し付ける。

八郎　何だ……こりゃ、握り飯か……これを俺に？　俺に食えというのか？

綾女、うなずく。

八郎　食うぞ。食っちまうぞ。あとで返せなんて言うな。

八郎、その場に座って握り飯を頬張る。

綾女、傍に座って見ている。八郎がすすめるが、首をふる。おなかはいっぱいという仕草。うれしそうに見ている。

八郎　こんなことして、おっ母さんに怒られねえか。おっ母さん、小さい頃、おまえのことといじめたやつらを棒きれで追いまわしていたもんなあ。ありゃこわかった。

綾女、笑う。

八郎　うめえなあ、ただの握り飯なのに。どうしてこんなにうめえのかな……そんなに俺の顔を見るな。そんなふうに近くでじっと見られたことなんてねえから……俺、女は苦手だ……でもおまえは、聞こえねえから……でも俺の言ってること、わかるんだろ？

綾女、うなずく。

八郎　そうか……こういうとき、何を話すんだろ……そうだな……おまえは、おまえはえらくきれいになった。小さい頃はいつも泣いてて、ぐしゃぐしゃだったから、わからなかったが……きれいだ。

綾女、首をふる。自分の耳と口をさす。

八郎　聞こえなくたって、口がきけなくたって。おまえぐらいきれいなら、そのうちいいところから、嫁にくれって……。

綾女、首をふる。

八郎　大丈夫だ。この俺だってこうして……。

綾女、太鼓の傍へ。太鼓を撫でる。

八郎　おまえ、太鼓が好きか？

綾女、うなずく。

八郎　そうだな。聞こえなくても。このドーンというやつはわかるんだろ。

八郎、綾女の手をとって太鼓の胴につかまらせる。バチをとって、打つ。

八郎　どうだ？

綾女、うれしそうな顔。

八郎　わかるか。そうか、わかるか。

八郎、続けて一節。綾女は太鼓につかまってじっとしている。

八郎（打ち終え）どうだ、太鼓は。いいか？

綾女、うなずく。

八郎　そうか。よーし、綾女にもたたかせてやる。なあに、今時分、誰も来やしねえ。

八郎、綾女にバチを握らせ、手を添えて打つ。ダダーン。

綾女、うれしさとこわさの混じった何とも言えぬ表情。

手習いのように一打ち一打ち教える八郎。最初はぎこちないが、段々うまくなる綾女。

一演奏終わる。

二人、しゃがみこむ。

八郎　あはは、うまいうまい。綾女は太鼓名人だ。

二人、目が合う。綾女、八郎の汗を拭おうとするが、八郎はそれをとどめる。

八郎（動揺）よせ、そんなことはするな。そんなこと……。

八郎の歌。『こんな気持ちは初めてだ』

どうしたことだ　初めてだ
こんな気持ちになったのは
たまごをそっと手のひらに
のせられたような
すべすべしていて　危うくて
こんな気持ちは初めてだ
胸がおどって　おさまらねえ
口がかわいて　しかたねえ
教えてほしい　何なのか
教えてほしい　この気持ち

八郎（独白）綾女の、綾女のせいか……俺は、

どうしちまったんだ。

どうしたことだ　初めてだ
こんな気持ちになったのは
ひながいきなりふところに
とびこんだような
ふわふわしていて　あたたかく
こんな気持ちは初めてだ
胸が熱くて　たまらねえ
顔が火照って　かなわねえ
教えてほしい　何なのか
教えてほしい　この気持ち

綾女の母、突然、二人の前に。

綾女の母　綾女！　親の目を盗んで、こんなところで乳繰り合ってたのか！

綾女の腕をつかんで引き寄せる。

綾女の母　八郎、よりによってうちの娘に悪させんでもいいだろう。
八郎　悪さなんて、俺は何も……。
綾女の母　何もしてねえというのか。こんなところへ引っ張り込んで。
八郎　引っ張り込んでなどいない。気が付いたらここにいた……。
綾女の母　何をしていた。
八郎　太鼓だ。
綾女の母　太鼓だと。
八郎　綾女が、太鼓を……太鼓を聞きたいようだった。それで太鼓を打って。
綾女の母　太鼓を聞きに？　この子がか？　ははっ、馬鹿も休み休み言え！　耳が聞こえぬ者が、太鼓を（笑）。八郎、もう少しましな言い訳が思いつかんのか。
八郎　嘘じゃねえ。
綾女の母　……。
八郎　綾女には太鼓がわかる。綾女は太鼓が好きなんだ。

綾女の母　御託はもういい！

八郎　ほんとうだ……。

綾女の母　祭りですこしばかり持ち上げられたんで、いい気になって。すっかり天狗だ……太鼓馬鹿の変わり者でも、悪いことはせぬやつだと思っていたら、やれ、とんでもない悪党だわ。

綾女の母の歌。『たいしたもんだ』

たいしたもんだ　洟たれ小僧が
今じゃやりての　女たらしさ
蜘蛛の糸をば　張り巡らして
かよわい羽根にからませる
大将首を集めるように
女の操も　ひいふうみい

綾女、さかんに否定する仕草。

綾女の母　ええいっ、うるさい！　おまえもおまえだ。この尻軽！

八郎　違う。ほんとうに、俺たちは、そんなんじゃねえ！

綾女の母　俺たちはだと？　そんなんじゃなきゃ、どうなんだ！

八郎の歌。『俺たちはただ』

俺たちはただここにいただけ
俺たちはただここにいて
俺たちはここにいて
俺たちは　俺たちは
俺とあいつ
約束ひとつ　しやしない

綾女の母　信じられるものか！

綾女の母の歌に八郎の歌、重ねて。

たいしたもんだ　寝小便小僧が

今じゃ名うての　色事師さ
蟻地獄の穴　罠をしかけて
かよわい足にまといつく
落とした城を数えるように
女の操も　いつむうなあ

俺たちはただここにいただけ
俺たちはただここにいて
俺たちはここにいて
俺たちは　俺たちは
俺とあいつ
約束ひとつ　しやしない

綾女の母　たいしたもんだな、八郎。
八郎　俺たちは……。
綾女の母　二度とうちの子に近づかないでおくれ。いいかい、この次はただじゃすまないよ。

綾女、母親に引きずられるように退場。
立ち尽くす八郎。

八郎　俺たちはただ……。

『俺たちはただ』をスローテンポで。
途切れ途切れに。物悲しく。

俺たちはただここにいただけ
俺たちはただここにいて

八郎　はあ……（溜息）

俺たちはここにいて
俺たちは　俺たちは
俺とあいつ
約束ひとつ　しやしない

八郎　約束、ひとつ……。

間。

突然、太鼓の音。

八郎　な、何だ！

太鼓のところへ行くが誰もいない。

八郎　気のせいか……。

また、太鼓の音。

八郎　気のせいじゃねえ。鳴ったぞ。この太鼓だ。だが……。

太鼓の音、続く。八郎、後退る。

太鼓の演奏。秋祭りの太鼓のような素朴なものでなく、極めて技巧的な打法。

八郎、聞き惚れている。

演奏、止む。

八郎、我に返る。

八郎　何という太鼓だ……一体、誰が。

鬼八の歌『十と五つ』。嗄れ声。

十と五つの太鼓月
月夜の晩に　繭を解く
二つごもりの　兄妹
兄は東に　妹は西に

八郎　誰だ、出てこい！　隠れてないで。

十と五つで双子塚
塚のしるしの柘の木も
二本そろいの　兄妹
兄は右手に　妹は左手に

鬼八の声　八郎だな。

八郎　お、俺の名を知っているのか。おまえは誰だ。姿を見せろ！

鬼八の声　見たいか。ならば見せてやっても

いいが、腰を抜かすなよ。

鬼八、姿を現す。

八郎　わっ、な、何だ、おまえは！

鬼八　俺か。俺は鬼だ。

八郎　お、鬼……お、俺を喰うのか。

鬼八　俺は人など喰わぬわ。仲間のうちには食うやつもいるがな。鬼にもいろいろいるのだ。

八郎　ほんとに喰わんのだな。

鬼八　くどい。俺はな、鼓鬼といって太鼓を打つのが役目の鬼だ。

八郎　太鼓を？

鬼八　太鼓の鼓と鬼で鼓鬼だ。鬼は決して名乗らぬものだが、特別に教えてやろう。俺は鬼八という。

八郎　鬼八……。

鬼八　おまえは八郎、俺は鬼八。どちらも名に八がつく。気が合いそうではないか。なあ、兄弟、知っているか。八という字は、太鼓のバチを構えた形だ。

八郎　……さっきの太鼓はおまえ様か？

鬼八　そうだ、この俺様だよ。ちょいと姿を消してな……どうだ、おまえの太鼓とは違うだろ。

八郎　ああ……。

鬼八　俺にいわせりゃ、おまえらのは百姓太鼓。野良太鼓だ。

八郎　野良太鼓……。

鬼八　ガツンガツンと鍬で地べたを掘ってるようで、とても聞けたものではない。

鬼八の歌。『ひでえ太鼓だ』

ひでえ太鼓だ　まったくよ
耳のさわりだ　ほんとによ
ドンガラドンガラ　ドンカッカ
浮かれ太鼓だ　大馬鹿だ
ドンガラドンガラ　ドンカッカ

土の臭いの野良太鼓
彩も色気もありゃしない

ひでえ太鼓だ　まったくよ
耳のけがれだ　ほんとによ
ドンガラドンガラ　ドンカッカ
ムジナ太鼓だ　大化けだ
ドンガラドンガラ　ドンカッカ
肥の臭いの野良太鼓
粋も凄味もありゃしない

八郎　……。
鬼八　何とか言ってみろ。
八郎　……。
鬼八　八郎、くやしいか。
八郎　……。
鬼八　俺の太鼓を習いたくねえか。
八郎　え？
鬼八　その気があるなら、手ほどきしてやってもいいぞ。同じ名のよしみでな。
八郎　教えてくれるというのか。今のおまえの太鼓を。
鬼八　誰にでもというわけではない。おまえは筋がよさそうだから。
八郎　俺の太鼓を聞いたのか。
鬼八　まあ、村のやつら相手の祭太鼓の打ち手で終わりたいならこのままでいい。
八郎　……。
鬼八　どうする、よすか？
八郎（土下座して）頼む。頼みます。どうか、どうかお願いします。この通り。
鬼八　よーし……ただし、俺に太鼓を習ったことを、誰にもしゃべっちゃならねえ。守れるか？
八郎　しゃべらねえ。決してしゃべらねえ。
鬼八　親にもだぞ。
八郎　俺に親はいねえ。もししゃべったら、おまえに喰われてもいい。
鬼八　俺は人など喰わんといったろ（苦笑）……ではさっそく稽古をつけてやろう。

八郎　今からか？

鬼八　善は急げというではないか。鬼がいうのはおかしいが（笑）……おい、兄弟。目ん玉をしっかと開いて、よおく見てろ。耳の穴をかっぽじって、よおく聞いておけ！

鬼八、打ち始める。舞のような美しい動き。腕を水車のように回し、バチを投げ上げる曲芸のような所作も見せる。八郎は隣でその所作を真似る。最初はぎこちないが段々、そっくりの動きになる。

いつのまにか鬼八と入れ替わり、太鼓を打っているのは八郎。

一曲、打ち終わる。

鬼八　これで終わり。

八郎　え？

鬼八　稽古は終わりといったんだ。

八郎　もう終わりなのか。

鬼八　もう教えることはない。呑み込みのよさには正直驚いた。水に落とした綿のように俺の技をたちまちに吸い込んじまった。おまえは、俺の見込んだ通り、いやそれ以上の打ち手だ。

八郎　鬼八さ、おれはまだまだ。

鬼八　あとは技に磨きをかければいい。砥石をかけるように、じっくりと。

八郎　そうか……あんたに何かお礼がしたいが、俺は貧乏百姓で、差し上げるものなど何もない。だが、俺にできることがあれば、何でもするから言ってくれ。

鬼八　何でもか（笑）。兄弟、そんな気遣いは無用だ。それよりも、おまえが太鼓の名人に、正真正銘、国一番の太鼓名人になること、これが俺の望みだ。

八郎　国一番なんて……。

鬼八　おまえなら必ずなれる。だから、これからも精進怠らず、ただ励め。それが俺への一番の礼になる。

八郎　鬼八さはもうここへは来ぬのか。
鬼八　ああ。
八郎　もう会えぬのか。
鬼八　そうだな、今度会うのは刈り入れのときだ。十分、実ってから（八郎の腕を撫でる）。
八郎　刈り入れ？　刈り入れはとっくに終わった。ひどいもんだったが……ああ、来年ということか。
鬼八　では俺は行くぞ……じゃあな。

鬼八、消える。

八郎　鬼八さ……ありがとう。ありがとうございます。

8

祝言の場。
村人たちがこれから行われる祝言の場の準備を整えている。
村人たちの『不思議な太鼓』

聞いたか　聞いたか　あの太鼓
耳を酔わせる　不思議な太鼓
とびきり上等な　酒のようさ
体の重しがとれて
空にふわりと浮いて
つらいおもいも悲しみも
どうでもよくなる　風に飛ぶ

聞いたわ　聞いたぞ　あの太鼓
夢見心地の　不思議な太鼓
くせになりそうな　酒のようだ
体の重しがとれて
池にぽかりと浮いて
つらいおもいも苦しみも
どうでもよくなる　水の底

聞いたか　聞いたわ
聞いたか　聞いたぞ
聞いたか　聞いたわ
聞いたか　聞いたぞ
不思議な　不思議な　不思議な
不思議な　不思議な太鼓
つらいおもいも悲しみも
つらいおもいも苦しみも
どうでもよくなる……よくなる

村の女３　しかし、あの太鼓には驚いた。

村の男３　八郎はいつのまに、あんな太鼓を覚えたんだ？

村の男７　暇さえあれば稽古場に籠っていたからな。それにしてもたいしたもの。

村の女４　殿様も大喜びだったと、村役様がいっとった。「これほど見事な太鼓を余は初めて聞いた。そちこそ名人の中の名人。国一番の太鼓名人だ」と。

村の男７　えらくたくさん褒美をくだされたという話じゃないか。

村の女５　ほんとうなの？

村の男８　ほんとうさ。だから、こんな祝いもできるというわけだ。

村の女５　そうと知っておれば、私だって。

村の女６　何だい、褒美のことを聞いたら急に。図々しいったらありゃしない……これがほんとのあとの祭り。

村の女５　ふん、あんただって前は気味の悪いやつだと、八郎のこと、さんざん悪く言ってたくせに。宗旨替えが早いねえ。実は言い寄ってみたが袖にされたね。

村の女６　何だって！

村の女３　これ、やめんか……だが、もう八郎のことを太鼓馬鹿などと言ってはならんぞ。

村の男８　国一番のお墨付きをいただいたのだから、それはつまり殿様を馬鹿というのと同じこと。知られたら首を切られる。

村の女５　ほんとか。

村の男４　やつは運がいい。作次さが打てなくなって代わりをまかされた。そうしたら今度は殿様のお出ましだ。

村の男５　殿様がこんな山奥の村においでになることなど十年に一度もない。

村の女３　十年ではない。この前に来たのは二十年前だ。

村の男７　ああ、あの年だった。

村の男４　八郎は滅法ついているのだ。それだけだ。

村の男６　そうだ、俺はついてねえ。

村の男８　ついているだと！　運がいいだと！　何をこく。八郎だって命がけだったんだぞ……いいか、気に入られたからよかったものの、もしも八郎の太鼓がお気に召さず、不興をかうようなことがあったらどうなった。もてなしが不出来だったために、いつもの年より多く年貢がかけられた村もあるんだ。

村の女４　村役様も言っておった。あれは一か八かだったと……ここずっと不作だというのに、これ以上のことなどできるものではない。

村の男８　おまえらは呑気に聞いていたのだろうが、わしらは冷や冷やしておった。

村の女３　さあさあ、もうその話はいいではないか。済んだことだ。そろそろ嫁御と婿殿がやってくるころだ。みんな、急いだ、急いだ。

準備に戻る村人たち。

村の男３　殿様ははじめつまらなそうな顔をされていた。あくびまでして。

村の男６　そうなのか。

村の男３　それが途中から、八郎の太鼓が変わった。いつものやつじゃない。初めて聞く。あれは作次さから習ったものではあるまい。

村の男６　作次さでなければ誰から？

村の男３　知るかい。それからだ、殿様も身を乗り出すようにして。

おかめの面を被った村の男９とひょっとこの面を被った村の男10がおどけた踊りと歌『めでためでたの』で登場。

めでためでたの高砂や
鶴と亀とが夫婦になった
鶴は千年　亀万年
鶴の亭主が先に逝き
亀の女房は後家暮らし
九千年の後家暮らし
めでためでたの高砂や

村の男４　なんだ、おまえら。

村の男９　見ての通り、結びの神だ。

村の男５　へっ、お似合いだ。

村の男９　うるせえや。村役様にやれといわれた。しかたなかろ。

村の男４　国一番の名人様の祝言だものな。

村の男９　そういうこと。

村の男10は村の女５、６にふざけかかって。

村の女３　おお、嫁御と婿殿のおでましだ。

村役が先導。綾女と母親。綾女の美しい花嫁姿に一同、みとれる。八郎もなかなかに凛々しい。

村役　どうした。嫁御がきれいなんで皆口もきけぬか。いやいや、わしも驚いた。器量好しとはわかっていたが、これほどとはな……八郎も立派だぞ……おっ母様や吾助も喜んでいるはずだ……さあ、皆の衆、若い二人だがよろしくめんどうをみてやってくれ……ということでな、あとは堅苦しいのはやめて、にぎやかに。

村役に促され、村の男９、１０が踊り、歌う。

めでためでたの高砂や
鶴と亀とが夫婦になった
鶴は千年　亀万年
鶴の亭主は覚えが悪く
己れの歳を忘れてしまい
気がつきゃ女房と一万年
めでためでたの高砂や

盃をかわしあう人々。笑い声。ときどき目を交わす綾女と八郎。綾女と母親に祝福の言葉をかける村の女たち。綾女の父、権三の表情は固い。村人のかたまり（グループ）ごとの台詞が混じる。

〈グループ①〉

村の女５　八郎もせっかく国一番の太鼓名人になったのだから。綾女でなくても、相手はいくらでもいただろうに。

村の女６　知らないの。綾女はね、八郎が一人で太鼓の稽古をしているところへ忍んでいったんだ。

村の女５　顔に似合わず大胆な娘だね。うぶな八郎も色仕掛けにころりか。

村の男５　その噂なら聞いたぞ。あのおっかねえおっ母に、八郎、どやされたということだったが。

村の女５　こわいおっ母さんも、褒美の金に目がくらんだのさ。

村の女６　そうそう。

村の男６　ああ、綾女はきれいだなあ。

村の女５　何、ぼーっとしてるんだい！

〈グループ②〉

村の女３　八郎はいい嫁を選んだ。綾女は耳は聞こえぬが、賢いし、働き者で気持ちのやさしいいい娘だ。

村の男８　嫁なんぞ、すぐ口うるさくなるもんだが、綾女ならそんなこともないしな。

村の男４　話し相手にならぬ嫁ではつまらなくないか。

村の女２　綾女には八郎の口元を見るだけで言ってることがわかるし、八郎も綾女の顔つきや仕草をみただけで何が言いたいかわかるそうだよ。

村の女３　ほお。

村の女２　綾女が八郎の肩のあたりをトントンとやる。こんなふうにな（村の男４の肩をたたく）すると、八郎がたたき返す。それで話が通じるのだと。

村の女３　好いた同士とはそういうもの。

村の男４　けっ、背中がむずがゆくなる。

村の男８　妬っかむな、みっともないぞ。

〈グループ③〉

村の男３　綾女の親父はどうしてあんなに気難しい顔をしてるんだ。

村の男７　権三はいつもあんな顔だ。

村の女１　気に入らないのさ。

村の男７　八郎がか？　だが、許したんだろ。

村の女１　母親に押し切られたのさ。おっ母さんは殿様お墨付きの名人なら十分だと思ったんだろ。

村の男７　権三は不服なのか。

村の男１　器量好しとはいえ、ああいう子だ。権三だって高望みをしているわけではない。どうも太鼓が好きではないようだ。

村の男３　権三もか。確か、八郎の親父も嫌いじゃなかったかい？

村の女１　綾女は確か、晋八さの……。

村の男１　晋八の女房が権三の妹。

村の男７　晋八さのことがあるから気に入らないのか。

村の女１　詳しいことは知らん。あの頃、私もまだ子供だったから。

村の男３　何の話だ？

村の男１　忘れようたって忘れられるもんじゃねえ。大勢の……。

村の男７　もうよそう。めでたい席だ。

村の女１　この婚礼も何か因縁めいて……。

酔った村の男９と10の滑稽な掛け合い。全員が注目。

村の男10　太鼓八郎、夜なべで稽古。

村の男９　何の稽古じゃ、太鼓かい。

村の男10、村の男９を四つん這いにさせ、尻をたたく。

村の男10　太鼓のかわりに、かかの尻、ぺたんぺたん張りつける。

村の男９、大げさに痛がる。

村の男10　赤く腫れよが痛がろが、ぺたんぺたんと調子よく。

爆笑。腹を抱えて笑う者も。今度は村の男10が四つん這いに。

村の男９　太鼓八郎、朝まで稽古。

村の男10　せいが出ますな、太鼓かい。

村の男９　それじゃ今度はかかの番。股に挟んだバチつかむ。

村の男９、村の男10の股間をさぐる。逃れようとする村の男10。

村の男９　されどせつなや一本きりで。一本きりでは打てやせぬ。

大喝采。

村の男２　どうだ、八郎さ。ひとつ太鼓を所望できないか。

村役　おお、それがいい。八郎、国一番の名人の技をみせてくれぬか。

八郎　俺はかまわんが。

村役　じゃあ、太鼓のしたく……何だ、手回しがいいな。

太鼓がすでに用意されている。身支度をする八郎。手伝う綾女。

八郎、おもむろに打ち出す。秋祭りの太鼓、踊り出す村人たち。

さあ　唄えや唄え
声張り上げて
唄えや唄え
のど枯れるまで
さあ　踊れや踊れ
腰を伸ばして
踊れや踊れ
目の回るまで
今宵一夜は太鼓に誘われ
今宵一夜は男と女
今宵一夜はご勘弁

村の女３　八郎、あの太鼓をやってくれんか。殿様の前でやったやつを。

村の男８　おお、あれがいい。

他の者も同意。

八郎、打ち始める。鬼八に習った太鼓。打ち終える。

どよめき。

村の男２　ほお、こりゃまた。

村の女４　何とも不思議な太鼓だ。

村人たち、口々にほめそやす。

作次　もうよせ、八郎。
八郎　え？
作次　その太鼓はやめろ。
村の男８　作次さは何を言ってるのだ。
作次　二度と打つな。ここで誓え。
村の男２　どうしたというんだ。
村役　おい、作次さ、何がいかんというのだ。この太鼓は殿様に気に入られたのではないか。いわば村を救った太鼓だ。
村の女３　いい太鼓ではないか、何が不服なんだい？
村の男３　作次さ、おかしいぜ。八郎が国一番になったのが気にいらねえのか。
作次　なんだと！
村の男５　やきもちはみっともねえな。
村の男６　みっともねえ。
作次　うるせえ！　八郎、あの太鼓は誰に習った。言ってみろ。
八郎　だ、誰にも習わん……俺が、俺が考えた。
作次　嘘をつけ！
八郎　嘘ではない。
作次　貴様、わしをだませると……。

八郎につかみかかる作次を村の男２、４が止める。

村役　作次さよ、ここいらで一番の打ち手だったおまえでなくて、いったい誰が教えるというのかね。ここいらに八郎が太鼓を習う相手がいるとは思えんが。
村の男８　そもそも八郎を後釜にと言い出したのは、他ならぬおまえさんではないか。その八郎が国一番の打ち手になった。喜んでやるのが師匠というもの。
作次　そんなことはどうでもいい……あの太鼓は、あれは人の考えつく太鼓ではねえ。
村の男３　人でなければ何だ？
作次　それは……。
村の男５　狸ではないか。あれはポンポコ腹

鼓を打つからな。

村の男６　違いねえ。

村人たち、笑う。

作次　八郎、皆はだませてもわしはだませんぞ。もう一度言う。二度と打つな。あの太鼓はおまえの災いになる。

作次、退場。

村役　何だかおかしなことになったな。作次も少し酔ったのだろう。では皆の衆、ここらでお開きにしよう。

村人たち、片付けながら退場。
八郎と綾女の父、権三が残る。

権三　八郎。

八郎　は、はい。

権三　綾女を頼む。

八郎　はい。

権三　太鼓はほどほどにな。

八郎　え？

権三　太鼓は……おそろしい。

権三、退場。

八郎　太鼓は、おそろしい……。

９

雨乞いの場。
護摩をたいている。
村人たちの雨乞いの歌。『雨をくだされ』と『どうしたことだ』の二重唱。

雨をくだされ　天の水
降らせてくだされ　今すぐに

雨の神様　おでかけか
いかにも遠くへ　おでかけだ
あなたが留守をしてる間に
われらは冥土の旅に出る
雨をくだされ　天の水
降らせてくだされ　少しでも
雨をくだされ　命水
気づいてくだされ　この煙

どうしたことだ　一月も降らぬ
どうしたことだ　一滴も降らぬ
どうしたことだ　一月も降らぬ
どうしたことだ　一滴も降らぬ
どうしたことだ　一月も降らぬ
どうしたことだ　一滴も降らぬ
空を見上げて　さがせども
雲のかけらも　見当たらぬ
川も日に日に　やせ細り
今じゃちょろちょろ　帯の幅

村の男４　毎日毎日、川から水を汲んでは畑にまくが、焼け石に水。
村の女５　あっという間に地べたの奥に吸い込まれてしまう。
村の女６　苗はどれも地べたに這いつくばってあえいでる。
八郎　まるで末期の水をくれているようだ。

雨をくだされ　天の水
降らせてくだされ　今すぐに
雨の神様　わずらいか
いかにも重い　わずらいだ
あなたが床にいるうちに
かわきの病が地を覆う
雨をくだされ　天の水
降らせてくだされ　少しでも
雨をくだされ　命水
気づいてくだされ　この祈り

どうしたことだ　一月も降らぬ

どうしたことだ　一滴も降らぬ
どうしたことだ　一月も降らぬ
どうしたことだ　一滴も降らぬ
どうしたことだ　一月も降らぬ
どうしたことだ　一滴も降らぬ
空を見上げて　さがせども
雲のかけらも　見当たらぬ
沼も日に日に　飲み干され
主もいよいよ　引越しか

八郎　このままではいったいどうなるのだ。二年続きの不作で、蓄えなんてすっかり底をついているというのに。

村の男６　飢饉になるのか？

村の男８　よせ。飢饉などと、口にするな。

村の男９　大丈夫なのか？

村の男８　俺にわかるものか。

村の女３　このままでは飢饉だ。

村の男２　ばあさん、そんなこと。

村の女３　取り繕ってもしかたあるまい。このまま降らねば、間違いなく飢饉だ。二十年前のように。

村の男５　間違いないのか。

村の女３　二十年前とそっくりだ。

村の男７　あのときゃ大勢死んだ。村の半分が死んだ。

村の女５　うちもまだ小さかった兄さんや姉さんが死んだって。

村の女６　うちも。よくおっ母さんから聞かされた。

村の男７　弱い者から死ぬ。小さな子供や年寄りから。わしらも今度は覚悟せんといかんな。

村の女３　そのときゃ、わしは真っ先にいきたい。地獄を見るのは御免だ。

村の男６　飢饉は地獄か。

村の女３　地獄さ。生き地獄だ。親子が兄弟が食い物を奪い合う。皆、あさましく、むごたらしくなる。人が人の心を失くすのが飢饉だ。

村の男１　木の根や皮はいうに及ばず、最後は土まで口に。

村の女１　死人の肉を食らったなんて話も……。

村の女５　いやだ、いやだ。

村の女６　怖い、怖いよ。

八郎、綾女の腹をなでながら。

八郎　このままでは、せっかく生まれてきても食わせるものがねえ。

村の女５　なんとか、ならんのか。

村の女３　おてんとうさまのことばかりは、どうにもならん。

村役　よさんか。そのため雨乞いをしているのではないか。祈りが通じれば、雨は降る。必ず降る。

照爺　よせよせ、雨乞いなぞ。無駄なこった。

村の男１　照爺、昼間から酔っているのか。いいご身分だな。

照爺　雨乞いで、降ったためしはないわ。

村役　余計なことを……おまえら、この酒臭い爺をつまみだせ！

村の男５、６が照爺をつまみだそうとするが、その手を振り払う。

照爺　本気で雨がほしいのなら、なぜ響山へ行かぬ。

村の男５　響山へ？　響山の頂上で雨乞いでもしろというのか。

照爺　竜神太鼓じゃ。山奥の祠にある竜神様の太鼓は雨雲を呼んでくださる。太鼓を鳴らせば、たちまち雨が降る。

村の男５　竜神太鼓？

村の男４　何だ、それは。ばあさま、そんなものがほんとうにあるのか？

村の女３　さあて、寝物語に聞いたことがあるようなないような……。

村の女５　そんな霊験あらたかな太鼓がある

なら、どうして使わないの？

村の男６　そうだ、響山など、行って行けない場所ではない。

村役　おいおい、馬鹿な話にのせられるな。そんな都合のいいものが世の中にあるわけがなかろう。

照爺　村役様はご存じないかもしれんが、おい、作次、おまえはよーく知ってるな。

作次　竜神太鼓はお伽話だ。

村の男６　何だ、照爺の法螺か。

照爺　法螺じゃねえ！　法螺なんかじゃねえ。そうか作次、しらばっくれるか。じゃあ、権三、おまえはどうだ？

権三　俺は何も知らん。

照爺　そんなはずあるまい。なにしろおまえの妹の……。

作次　うるさい！　知らんと言ってるだろ。どこかへ失せろ。この酔っ払いが。

照爺　なら作次、答えろ。他の誰も知らなくても。おまえが知らぬわけがない。

作次　くどい！　わしはそんなものは見たこともなければ、聞いたこともない。

照爺　見たことはなかろうよ。だが、ほれ、そこにいる八郎の親父、死んだ吾助から聞いているはずだ。

八郎　おっ父から……。

照爺　おお、そうだ。八郎よ、国一番の太鼓名人殿。ここはひとつ、村を救ってくれぬか。飢饉がおこる前に響山へ行き、竜神太鼓を鳴らして……。

作次、照爺につかみかかる。

作次　この、死にぞこないの耄碌じじい。そんなに行きたいなら、おまえが行け！　響山でもどこへでも行って、銅鑼でも太鼓でも鳴らしてこい！

村人たち、作次を押しとどめる。

村の女６と綾女が照爺を助け起こそう

とすると、急に何かに怯えたように差し伸べた綾女の手をふりほどく。

村の女６　何だい、ありゃ……いつもの照爺じゃないね。

照爺、作次、それぞれ村人たちに連れていかれる。

村役　竜神太鼓か……作次もあんなにむきにならなくてもいいのに。

他の者も退場。

八郎（綾女に）先に帰っていろ。俺はもう少しここにいる。考えたいことがある。

綾女、心配そうな顔をするが、従う。八郎、一人に。

八郎　竜神太鼓……おっ父……作次さ……権三さ……響山……どうなっているんだ。

舞台、暗くなる。

鬼八の声　八郎。

八郎　……誰だ。

鬼八の声　八郎、俺だ。

八郎　その声は……鬼八さか。

鬼八の声　兄弟、忘れずにいてくれたか。

八郎　忘れるものか。あんたは俺の師匠。国一番の太鼓名人などと呼ばれるようになったのも、みんなあんたのおかげだ。

鬼八の声　殿様もずいぶんご機嫌だったな。

八郎　見ていたのか、あの晩の太鼓を。

鬼八の声　ああ、姿を消してな。たいしたものだった。もう俺もおまえにはかなわぬ。

八郎　何を言う。まだまだだ……鬼八さ、ここには誰もおらん。姿を見せてくれ。

鬼八の声　誰もいないな。

八郎　大丈夫。

鬼八の声　女房もいないな。

八郎　いない。それに俺の女房なら平気だ。

鬼八の声　苦手なのだ。

八郎　綾女が気に入らないのか。

鬼八の声　名前がな。

八郎　名前？

鬼八の声　鬼には不吉な名だ。それに……まあいい。

鬼八、姿を現す。

八郎　ご無沙汰だった。かわりはないか。

鬼八　おまえはずいぶんかわったな。大層立派になった。

八郎　そんなこと……そうだ。鬼八さなら知っているだろ、竜神太鼓のことを。

鬼八　響山の竜神太鼓のことか。

八郎　やはりあるのだな。それでその太鼓を鳴らせば雨が降るというのは。

鬼八　竜神太鼓は雨雲を呼ぶ。

八郎　照爺の言ったとおりだ。鬼八さはその太鼓を鳴らしたことがあるのか。

鬼八　とんでもない。そんな神がかった太鼓に、俺たちはふれることさえできぬ。

八郎　俺、俺ではどうだ？

鬼八　おまえは魔物でも鬼でもない。ただの人だからふれることもできよう。だが、あれはやめておけ。近づかぬが身のためだ。

八郎　なぜだ。太鼓を鳴らすだけで雨が降るなら、こんなに楽なことはない。響山など半日もかからず登ることができる。

鬼八　よく考えてみろ。そんなに容易いことならば、これまで日照りに苦しむことなどなかったはず。俺が知る限りでも、百年このかた竜神太鼓を鳴らそうとしたものは一人も……待てよ、確かおまえの生まれる前の年だ。ひどい日照りだったが、太鼓に挑んだものがいたということだが。

八郎　飢饉の年だ。それで、誰が、誰が竜神

太鼓に挑んだのだ？

鬼八　そこまで俺は知らぬ。だがな、作次なら知っていよう。おまえの親父から聞いているはずだ。

八郎　おっ父？　おっ父が何を……（鬼八が消えている）鬼八、鬼八さ。

鬼八をさがす。作次、現れる。

八郎　あっ。

作次　何だ。

八郎　いや……。

作次　誰をさがしているのだ？

八郎　さがしてなどいない。

作次　……。

八郎　作次さ、竜神太鼓のことだが。

作次　あれは照爺の戯言だ。

八郎　二十年前の日照りの時、響山へ行ったものがいたのではないか。

作次　誰に聞いた、そんな話を！

八郎　それから　おっ父が……。

作次　やはりおまえには何か悪いものが憑いているな。竜神太鼓のことなどろくに知らぬはずの照爺を操って雨乞いの場で騒がせたのもそいつの仕業だろう……おまえにあの太鼓を教え、今度は竜神太鼓のことを吹き込んでいる。八郎、もうそいつの言うことに耳を貸すな。おまえを陥れようとしていることがわからんのか。

八郎　……作次さ。このまま雨が降らなんだら、飢饉になるのではないか。

作次　それは……。

八郎　また大勢、死ぬのではないか。

作次　……。

八郎　餓えて死ぬのはごめんだ。女房も死なせたくねえ。もうじき生まれてくる子も……

作次　俺は何とかしたいのだ。

作次　ま、まさかおまえ、響山へ行くつもりなのか？

八郎、うなずく。
作次、その場へ座り込む。煙草に火をつけ、煙を吐き出す。

作次　二十年前の夏のことだ。今年と同じように日照りが続いた。このままでは間違いなく飢饉になる。そのとき、晋八という男が竜神太鼓のことを言い出した。言い伝えにすぎんが、このまま手をこまねいているよりよかろうと。その場にいたのは、わしとおまえの親父、吾助の三人。太鼓の腕を競い合った仲だ。わしらは揃って響山へ行くことにした。村の連中には内緒でな。ところが出発の前の日、わしは不覚にも足を傷めて、歩くこともできなくなった。わしの足が治るのを待ってはおられぬと、二人は出かけた。

八郎　おっ父が……。

作次　これから先は、吾助から聞いた話だ。

八郎　……。

作次　二人は響山を歩き回り、やっとのことで祠を見つけた。そこには言い伝え通り、竜の鱗を張ったという竜神太鼓があった。

八郎　竜の鱗……。

作次　早速、晋八が打ってみた。だが、いくら打っても鳴らん。うんともすんとも言わん。それで吾助が、「俺が換わろう」と申し出たその途端、いきなりドドーン。

八郎　鳴ったのか、竜神太鼓が！

作次　耳をつんざくような音だったという。晋八は勇んで打ち続けた……だが、段々晋八の顔が青ざめてきた。「変だ、吾助、この太鼓は変だ。胸が、胸が締め付けられる」

八郎　……。

作次　打つのをやめようとすると、途端に心の臓をつかまれたような猛烈な痛みが襲ってくる……晋八はそういったそうだ。打てば痛みはおさまる。しかしそれでは、休むことなく打ち続けなくてはならん。

八郎　休めないのか……。

作次　わしらは竜神太鼓の恐ろしい秘密を知らなんだ。竜神太鼓は、一度鳴らし始めたら、雨が降るまで打ち続けなければならんのだ。もし途中でやめてしまったら、打ち手の心の臓を……。

八郎　どれだけ打てばいいのだ。どれだけ打ち続ければ雨は降るのだ。

作次　わからぬ。打ち手の力次第なのだろう。半刻かも知れぬし、三日でも足りぬかも知れぬ。天に祈りが届くまでか。

八郎　……。

作次　晋八は必死に打ち続けた。そうするしかなかったのだ。太鼓に捕らわれてしまったのだから……一日半、晋八は打ち続けた。

八郎　一日半、一睡もせずにか……。

作次　だが、雨は降らない。とうとう精も根もつきて、バチが手から離れた。その場にくずれるように倒れた晋八は、血の気が失せ、もうぴくりとも動かなかった。

八郎　……。

作次　吾助は晋八の亡骸をおぶって、村へ帰って来た。わしは今でも、晋八の血まみれの手のひらが目に焼き付いて……晋八を急な病ということにしてそっと葬った。吾助は余程恐ろしかったのだろう。一年ばかり気が変になっていた。

八郎　それでおっ父は太鼓を。

作次　晋八の女房には腹に子がいた。女の子が生まれたが、母親はまもなく死んだ。その子は母親の兄に引き取られた。おまえもよく知っている。

八郎　誰だ。

作次　権三だ。

八郎　ではその女の子というのは……。

作次　綾女だ。綾女は竜神太鼓で命を落とした晋八の子だ。

八郎　何ということ。

作次　八郎、これがわしの知るすべてだ。竜神太鼓は魔太鼓だ。何の目的か知らぬが、おそらく魔性の者によってつくられたも

のに違いない。所詮、わしらの手に負える代物ではない。

間。

八郎　作次さ、俺、響山へ行く。

作次　おまえ、わしの話を聞いていなかったのか！

八郎　竜神太鼓が恐ろしい太鼓だということはよくわかった。だが作次さ、人の命を奪うことができるような太鼓ならば、雨を呼ぶ力もあるのではないか。

作次　そんなことわからぬ。

八郎　俺は行く。綾女が俺の女房になったのもきっと何かの因縁だ。晋八さが義父殿なら、親の無念は子の俺が晴らさねばならん。傍にいて何もできなかったおっ父もさぞかしつらかったことだろう。

作次　おまえが倒れても、誰も運んではくれないのだぞ。山の中で野ざらしだ。それでいいのか？　それでも行くのか？

八郎　おっ父が死ぬ前に言った。太鼓は恐ろしいと。その意味が今わかった。だが、こうも言った。おまえが立ち向かわねばならぬときが来るかも知れぬと。

作次　吾助が……。

八郎　それが、今なのではないのか。

作次　……八郎、俺はもう止めぬ。止めても無駄だろう。だがな、おまえはきっと悔やむだろう。こんなことなら、飢え死にした方がましだったと。

作次、退場。

八郎　綾女……隠れてないで出てこい。

綾女、出てくる。

八郎　迎えにきたのか……ずっとそこにいたのか。

綾女、うなずく。

八郎　察しのいいおまえのことだ。作次さとどんな話をしていたか、およそのことはわかるだろう。俺は山へ行く（山の形を示す）。竜神太鼓だ（竜、そして太鼓を示す）。雨を降らせる（雨の降るようすを示す）……心配するな。俺は負けねえ。何せ国一番の太鼓名人様だもの（笑）。

綾女、八郎の手をとり、腹にさわらせる。

八郎　あ、動いてる。動いてるぞ。きっと腹の子の心の臓も、太鼓みたいに鳴っているんだ。ドクン、ドクン、ドクン……綾女、こいつのためにも俺は必ず雨を降らしてみせる。そして必ず帰ってくる。おまえの親父殿の、晋八さの二の舞は踏まねえ。

綾女、八郎に赤い櫛を渡す。

八郎　これを持っていけというのか。これは大事な……そうかお守りにしろというのだな。よおし、借りていこう。きっと俺を守ってくれるだろう。

八郎、やさしく綾女を抱く。

10

鬼八が平伏している。

闇の主の声　鬼よ、ずるがしこい狐よ。いよいよなのか。

鬼八　いよいよでございます。

闇の主の声　やって来るのだな。

鬼八　八郎は朝早く家を出て、山に向かって

おります。

闇の主の声　これで最後の二本が。

鬼八　長いこと、お待たせをいたしました。

闇の主の声　待った甲斐はあるのだろうな。

鬼八　申し分ないかと。

闇の主の声　これでわしは万の力を得る。すべてを壊し、それからすべてを創り、すべてを支配する力を。

鬼八　まことにめでたきこと。

闇の主の声　八郎よ、おまえがその腕で破滅の扉を開けるのだ。何という誉れか。飢饉など些細なことと思えるほどの、この世の終わり、阿鼻叫喚の地獄の始まりの合図を、おまえの太鼓が果たすのだから。

笑い声、響く。鬼八、消える。

11

響山の祠。

蜘蛛の巣の張った巨大な太鼓。

八郎　これか……これが竜神太鼓か。

八郎、傍らに落ちているバチを拾う。

八郎　これは……晋八さのバチだ。二十年前の……。

八郎、太鼓の蜘蛛の巣を払う。

八郎　そういや晋八さの名にも、八の字がある。鬼八さが、八は太鼓のバチを構えたかたちだといっていた。なら晋八さも八の兄弟だ（笑）。

八郎、上半身裸になる。髪にお守りの赤い櫛をさす。

八郎（ふと気づいて）……なんだ、こりゃ。（櫛に手をやり）赤い櫛って……おっ母の最期の言葉はこのことだったか。

八郎、太鼓に向き合う。

八郎　やめるなら今のうち。いったん始まったら、後戻りはできんぞ。

間。

八郎、大きく息を吸うと、バチを振りかぶり、渾身の力で打ちおろす。

ガチッと鈍い音。

もう一度。鳴らない。

八郎　やすやすとは鳴らせぬか。これでも俺は国一番の名人。門前払いなどさせぬ。

八郎　何度も打ちおろす。

突然、ズダダーンとすさまじい音。

八郎　さあ、太鼓地獄の始まりだ！

八郎、打ち続ける。

以下、独白のたびに太鼓の音は絞られ、八郎は打つ所作のみとなる。時間の経過を照明の変化で現す。

八郎　くそ、まだ降らぬか……負けんぞ、負けてたまるか。

暑さに耐えている。

八郎　暑い、暑い……汗が体中を這いまわる。百足のようだ。

体をよじる。

八郎　もうどのくらいになるのだ。半日か、もっとか。腹の中が空だから、そうとうた

ったはず。ああ、ふらふらしやがる。目が眩みそうだ。

疲労。眠気。

八郎　眠い。眠い……目を開けているのがつらい。あたりまえだ。もう一昼夜打ち続けているのだから……重い、重い。このバチは鉛でできているのか。

朦朧と。

八郎　不思議だが、空腹はおさまった。腹も減りすぎるとこうなるのか。だが、眠気は一向消えぬ。気を抜くと目が閉じる。このまま倒れてしまいそうになる……なぜ降らぬ。いつまで打たせるつもりだ。ああ、眠りたい。いっそこのまま……。

八郎の母の声　八郎、八郎。

八郎　その声は……。

八郎の母の幻影。

八郎　おっ母。俺を呼んでるのか。こちらへ来い。もう打たんでいい。楽になれと。

八郎の父（吾助）の声　八郎、八郎。

八郎の父の幻影。

八郎　おっ父か。おっ父、俺、来てしまった。助けてくれ。雨は降らん。いくら打っても降らん。どうすれば……。

八郎の兄姉たちの声　八郎、八郎。

夭逝した八郎の兄と姉たちの幻影（幼い子供の姿）。

八郎　誰だおまえたち……なぜ、おっ父とおっ母の傍に……そうか、兄さと姉さたちか、

皆で俺を呼んでいるのだ。

八郎の父母兄姉　八郎、八郎。

八郎　俺も行く。俺もそっちに……。

コンスカカンと丸太をたたく音。

八郎の母　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

八郎の父　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

八郎の兄姉　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

八郎　打っている。打っているではないか。こんなにも、こんなにも。なのに降らん。

八郎の母　綾女のために打て、八郎。おまえを案じている愛しい女房のために打て。

八郎の兄姉　子のために打て、八郎。生まれてくるかけがえのない命のために打て。

八郎の父　みんなのために打て、八郎。おまえに託すしかない村の衆のために打て。

八郎　打っている。打っている。俺は打っている。だが……。

八郎の父母兄姉　八郎、おまえはわたしらが残した望み。わたしらの魂は、いつもおまえの傍にいた。わたしらはおまえと一緒。おまえが滅ぶとき、わたしらの魂も滅ぶ。だから、こっちへ来てはならん。

八郎　ああ……。

コンスカカンと丸太をたたく音。

八郎の母　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

八郎の父　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

八郎の兄姉　八郎、太鼓打て！　打って雨降らせ！

「八郎、太鼓打て！」を繰り返す声。それも小さくなり消える。同時に家族

の幻影も消える。

八郎　置いてくな。俺を、俺を置いてくな！

秋祭りの太鼓が聞こえてくる。段々大きくなる。村人たちが踊るシルエットが映る。

八郎　秋祭りだ。村の皆が踊っている。楽しかった。何と楽しかったことか。

『秋祭りの歌』が聞こえる。スローテンポ。

歌の後半から別の歌が重なる。『雨乞いの歌』。やがて、秋祭りの歌は雨乞いの歌によってかき消される。

八郎にスポット。

八郎　何だ、この光は……月？　月の光……もう丸二日も打ち続けているのか。不思議だ。腕だけはまるで俺とは別の生き物のように動いている。それに俺の手はきれいなままだ。晋八さの手はマメがつぶれ血だらけになっていたと……不思議だ。だが、やがてくるのだろう。ぜんまいが切れるように、突然腕が動かなくなるときが。そのときが……。

晋八の声　八郎。

八郎　誰だ！

晋八の幻影。隣に晋八の女房。

八郎　綾女？　よく似ている……そこにいるのは晋八さと綾女のおっ母さんではないのか。

晋八の女房　八郎さ、綾女はどんなだい。

八郎　達者でいる。子ができた。

晋八の女房　そうか。子ができたか。

八郎　晋八さ、義父殿、教えてくれ。これから先どうなる。もうだめなのか。

晋八　おまえは俺と違う。何倍もすぐれた打ち手だ。おまえなら、きっとやれる。

八郎　買いかぶりだ。晋八さより長く打ってはいるが、何のかわりもない。かわる気配すらない。

晋八　おまえなら、やれる。なぜ、己が信じられぬのだ。

八郎　無理だ。もうやれねえ。俺なんかには……もうだめだ。

晋八の女房　八郎さ、その櫛は綾女の。

八郎　そうだ。お守りだ。これはおっ母さんのか。

晋八の女房、うなずく。

晋八　八郎、綾女を頼む。

晋八の女房　八郎さ、綾女を。

二人の幻影、消える。

八郎　綾女。綾女はどうしてる。眠れないでいるのではないか。腹の子にさわりがなければいいが……だが俺が死んだら、飢饉がきたら。弱い綾女は生きていけまい。腹の子も生きていけまい。

八郎、ふらつく。

八郎　腕が痛い。急に痛み出したぞ。無理もない。三日目の朝がくる。体が動いていることが奇跡なのだ。だが、とうとうおしまいになる……ちくしょう、ちくしょう……綾女、親父様の仇を討つことはかないそうもない。名人などともてはやされていい気になっていた。俺は身の程知らずの大馬鹿だった。おまえと一緒に餓えて死ぬ方がよかった。

転倒しそうなほど大きくよろめく。

八郎　くそ、もうじきだ。いよいよだ。腕が、足が、体中が悲鳴をあげ始めた……おお、そうだ。この世の名残に鬼八さに習ったあいつをやるか。作次さに止めろと言われたが、俺ももう最期。最期ぐらい好きな太鼓を打とう……国一番の太鼓名人八郎の打ち納めだ。綾女、夢の中で聞いてくれ。

八郎、うおうと一声吠えると、太鼓を打ち出す。以下は所作でなく実際の演奏。どこにそんな力が残っていたのかと思わせる迫力あるもの。かたちは鬼八に習った太鼓だが、命の残り火に浄化された全く別の太鼓。

太鼓の音、止む。

八郎、バチを構えたまま動かない。やがてバチが手から落ち、地面に転がる。

八郎、ゆっくりその場に崩れる。

間。

闇のテーマ。

闇の主の声　終わったな。

鬼八　さようでございます。

闇の主の声　ならば。

鬼八　さっそくに。

『十と五つの』ハミング。

鬼八、倒れている八郎の傍へ。

鬼八　やれ、兄弟。見事だった。俺が見込んだだけのことはある。あんな太鼓はほかの誰にも打てはしまい。おまえこそ、この世でもっともすぐれた打ち手。千本目にふさわしい腕の持ち主。

鬼八の手にはギラギラ光る山刀。

鬼八　ずいぶんと手間がいったが、やっと刈り入れの時がきた。悪く思うなよ、八郎。

鬼八、刀を振りかぶる。

鬼八　ぎゃあ！

突然、叫ぶ鬼八。見るとその足に櫛が刺さっている。綾女のお守りの赤い櫛。八郎の頭から抜け落ちたのを踏んづけたのだが、深く食い込んで抜けない。痛みにのたうちまわる鬼八。

闇の主の声　どうした、どうしたというのだ！

鬼八　蝮、蝮でございます。

闇の主の声　何を言ってる。それは櫛だ。ただの櫛ではないか。

鬼八　違います。赤蝮、毒の虫でございます。

鬼八にはそれが蝮に見える。気が転倒した鬼八、己の足を切り落とそうと刀を振り上げる。

闇の主の声　よせ、鬼八！　やめろ、やめるのだ！

その瞬間、バリバリズドーンという大音響と閃光。

落雷に直撃され、倒れる鬼八。

闇の主の声　馬鹿め、この大馬鹿者めが。あと少しのところだというのに、これで何もかも台無しだ！

遠く雷鳴。何度も。

雨乞いの場。

12

空を眺めている村人たち。

村の男９　あ……ありゃ、雨雲ではないか。

村の男２　そうだ、ありゃ雨雲だ。とんとお目にかかっていなかったが、確かに。

村の男10　雨雲なら、雨が降るのか？

村の女３　あたりまえだ。雨雲なら雨が降る。

村の男４　俺は信じねえぞ。この面に雨粒がぶちあたるまで信じねえ。

村の女５　雨雲だよ。風も変わった。湿った風だ。

村の男５　雨をほしがっているからそう見えるだけだ。腹が減ってるときは石ころだって餅に見える。

村の女６　あっ！

村の女５　どうした。

村の女６　冷たいものが、ここんとこに（額を指し）……。

村の男５　蝉の小便じゃねえか。

村の女６　蝉なんていねえ。

村の男６　あ、俺も蝉の小便。

村の女３　馬鹿、雨だ。こりゃ、雨だ。

村の男２　降ってきた。雨が降ってきた。

村の女５　雨だ、雨。助かった。

村人、口々に「雨だ、雨だ」と叫ぶ。

村の女３（村の男４に）どうだ、その雨粒はまだその間抜け面に届かんか。

村の男４　届いた、届いた！　ばあさま、届いたぞ。この間抜け面にも。

雨、益々強くなる。若い村人たちは雨の中を走り回り、転がり、ふざけあう。

村役　助かった。ほんとに助かった。これで生き返る。みんな生き返る。

村の男１　雨乞いのご利益ですかな。

村の男８　雨乞い？　これは雨乞いのおかげなのかい。

村の女１　ほかに何がある。
村の男９　雨乞いなんぞ……。
村の男10　竜神太鼓ではないのか？
村の男８　照爺の言ってた、響山の太鼓か？
村の男９　響山の竜神太鼓は雨を降らす。
村の男８　……それでは誰か、太鼓を鳴らしたというのか？
村の女３　そんなことのできるのは……。
村の男７　八郎だ！
村の男８　そういえば、八郎がいねえ。
村の女５　三日ばかり前に見かけたが、それからは……。
村役　まさか……。
村の男１　八郎が響山へ行ったのか。
村の男７　雨雲は向こうから、山の方からだ。
村の男３　そんな気がするだけさ。
村の女１　あれは、ただの言い伝えだって……。
村役　なあ、村役様。
村役　ああ、だが……。

村役が目をやる先に綾女と父母。作次。

綾女の母（綾女に）おまえ、濡れると体にさわるぞ。

綾女、平気というしぐさ。

綾女の父（権三）　やったな。
作次　ああ……。
綾女の父　やってくれた。
作次　やった。
綾女の父　八郎は、無事だろうか。
作次　……わからぬ。
綾女の母　無事だとも。綾女がお守りを持たせたから。
綾女の父　お守り？
綾女の母　櫛だよ、赤いやつ。
作次　櫛？
綾女の父　妹の形見だ。
綾女の母　あの子は八郎が山に行ってから一

睡もしていない。飯も食わない。お腹の子に触るからといくら言っても。

作次　戻ってくる。八郎は戻ってくるさ、必ず。あいつが戻らねば、いったい誰が祭りの太鼓を打つのだ。

雨の中で浮かれている村人たち。秋祭りの歌を、歌うというよりがなりたてている。

腹をおさえてしゃがみこむ綾女。

綾女　八郎さ（呼びかけるが、実際には唸り声のようにしか聞こえない）。

綾女の父　どうした、大丈夫か。

綾女　八郎さ、今、たたいた。お腹の中でたたいたよ。おまえの子が、どーんどーんって太鼓をやってる（すべて唸り声のような意味不明な台詞）。

作次　綾女は何と言ってるんだ。

綾女の母　たたいてるって、お腹の子が、太鼓を（泣き笑い）。

雷鳴。雨は一層激しく。

13

闇の中、「九百八十八、九百八十九……」と数える声。

蝋燭の前で平伏している鼓鬼。

闇の主の声　……九百九十八。

鼓鬼（顔を伏せたまま）九百と九十と八本。残りは二本。

闇の主の声　九百と九十と八本。残りは二本。あわせて千本。

鼓鬼　九百と九十と八本。残りは二本。あわせて千本にございます。

闇の主の声　おまえは誰だ。

鼓鬼　鬼でございます。

闇の主の声　鬼か、口ばかりで役立たずの鬼なら知っているぞ。黒焦げになってくたばりおったが。

鼓鬼　我ら百人兄弟の一人でございます。

闇の主の声　鼠どもめ。ならば、わしの望みを聞いておろう。

鼓鬼　残りの二本をそろえること。

闇の主の声　だが、何でもいいわけではない。

鼓鬼　この世で最もすぐれた太鼓の打ち手の腕をご所望。

闇の主の声　だが、いまだに見つからぬ。

鼓鬼　見つからねば。

闇の主の声　種をまくのか。

鼓鬼　御意。

闇の主の声　もうまいたか。

鼓鬼　まもなく芽を出しましょう。

闇の主の声　それを刈り取ることができると。

鼓鬼　さようでございます。

闇の主の声　二枚舌の蛇め！　もししくじってみろ。その口を引き裂いてやるぞ。

鼓鬼　いかようにも。

闇の主の声　鼓鬼よ、おまえの名は。

鼓鬼　我ら百人兄弟、名は皆同じ。

闇の主の声　それではおまえも。

鼓鬼（顔をあげる）鬼八でございます。

鼓鬼の顔は鬼八と瓜二つ。

鼓鬼、闇に消える。

コンスココンと丸太をたたく音。段々、大きくなる。

村人たちによる『太鼓八郎』が聞こえてくる。

太鼓のお稽古　ポンツクツ
ままま食う箸が　初手のバチ
お椀も膳も　あざだらけ
お椀も膳も　あざだらけ
太鼓八郎　トンツクツ
のんきなもんだ　お気楽だ

太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

舞台明るくなると、村人全員が並んでいる。

太鼓のお稽古　ポンツクツ
桶もたらいも　底を抜く
お鍋も釜も　こぶだらけ
お鍋も釜も　こぶだらけ
太鼓八郎　トンツクツ
いい気なもんだ　お目出度だ
太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

太鼓のお稽古　ポンツクツ
三つ子の魂　百までも
山の啄木鳥　秋の虫
山の啄木鳥　秋の虫
太鼓八郎　トンツクツ
あきれたもんだ　お手上げだ
太鼓八郎　トンツクツ
たたき疲れて　日が暮れる

了。